

～技で拓く～ 塗装店の挑戦

雪のため、1年のうち4～5カ月はほとんど仕事にならない北海道。この地の塗装業者の最大の悩みは「冬場の乗り切り方」だ。売上もさることながら従業員の雇用の確保も毎年巡ってくる重い課題。札幌市白石区の藤田塗装工業(社長・藤田哲也氏)は、「冬場の塗装仕事創出」に向けてユニークな試みを始めた。



同社は藤田社長の父親が昭和42年に創業。地元建設会社などからの下請仕事を主体に地道な営業を続けてきた。

しかし長引く建設不況の中で元請けからの単価は年々厳しくなるばかり。「元々が無理して受注しているのもどまも塗工事ができる発注単価ではない。そのような工事を続けていると長年この地で守り続けてきた看板に傷が付く」と下請けの厳しさにジレンマは増すばかり。その上、「回収でも何度か痛い目にあい、正直事業を続けていく気力を失いかけていた」と振り返る。

そのような中、他の職業に就いていた息子の諒さんが昨年戻ってきた。「息子が会社に入ったことで、きちんとした形で事業を残したいとの思いが強まった」と藤田社長。新たな挑戦を始め



ケレン作業はとにかく入念に

なんとしても冬場の仕事を創出したい

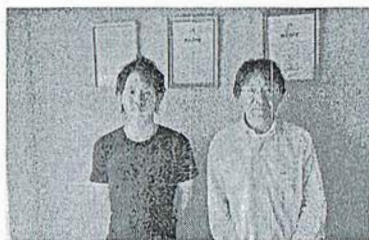
藤田塗装工業 (北海道)

ることになった。

その1つが直需工事の開拓だ。具体的には自社元請けによる戸建て住宅の塗り替え。「自分が手形取引でさんざん苦労させられたので息子には現金商売のビジネスをさせたい」との思いもあり、住宅塗り替えに照準を定めた。

集客方法はチラシとホームページ(HP)。チラシは「新聞折込を1回行った他、雨の日や仕事終わりに従業員が手まきで配布する程度」で、どちらかと言えばHPの充実に注力している。自社HP以外に新たに「札幌塗り替えセンター」のサイトを立ち上げて展開。ここでは諒さんがサイト責任者となり、同社の塗装にかかる思いや品質へのこだわり、ほぼ全施工物件からなる施工例の露出、新着情報として現在進行中の画像つき現場日報などを展開。またブログやツイッター、フェイスブックなどでの情報発信は、諒さん独特の感性もあり親近感を覚えさせる雰囲気醸成している。

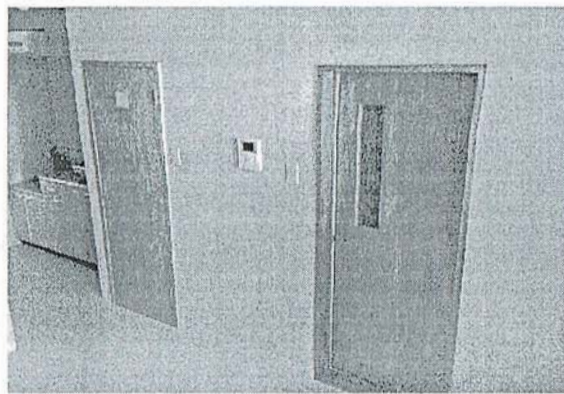
北海道では特に積雪のため屋根(トタン)の劣化が最も早く、消費者もそれへの対応が知りたいところ。同社HPの現場進捗情報では、とにかく入念なペーパーがけなど下地づくりに対する丁寧さで他社との違いが明確に感じられ、消費者の安心感につながる。「住宅塗り替えの直需を本格化したのは昨年からです。既に売上の4割ほどに成長しています。加えて現金取引というのも大きな魅力。北海道は首都圏などに比べてこの分野の競争がまだ少なく、早期に知名度を高めシェアを握っていききたい」とエンジン全開モードだ。



藤田哲也社長(右)と諒さん(左)

ユニークサービス、内装へ足掛かり

「札幌塗り替えセンター」のサイトを覗くと「冬期限定サービス」というユニークなタブに気づく。これは屋外で塗装工事ができない12月から3月限定のサービスで、同社の職人を客先に派遣し、室内の塗装工事を一緒に行うというもの。「家具を移動する、職人に指導してもらいながら一緒に塗装をするなどお客様自身で職人の使用範囲を決めて行うサービス。北海道は冬場の仕事なくなるため職人の仕事をいかに創出するかが大きな課題。季節雇用



アパート内装、色とテクスチャーで魅力アップ

という制度もあるが、職人本来の仕事である「塗装」でなんとか雇用を守りたく苦肉の策で始めたが、ここから内装仕事が広がりそう」とニヤリ。

このサービスを利用する客もいるにはいるが、それ自体で大きなビジネスになるとは考えていない。それよりも、「内装も塗装でできる」との気付きを与え、内装仕事創出への足がかりにしたい考えだ。

さっそくアパートオーナーのネットワークや設計士からの引き合いがあり、入退室に伴う原状復帰工事など具体的な物件が出始めた。

「塗装の最大の弱点はクロスに比べてコストが高くなる点。このためEPをベースにGLと寒水を混合、塗り方のコツを伴って1回塗りで仕上がる工法を確立した。色とテクスチャーで高いデザイン性を有しながら400円/㎡で提供でき、クロスとも十分対抗できる」と内装仕事創出のための武器を自ら創りだした。

また、キッチン扉など面材のリフレッシュ工法の確立、職人のエージング技法の習得、更に「内装に使えばその効果が実感しやすいのではないかと」と断熱塗材・ガイナの北海道初の施工認定店にもなった。

「北海道でも賃貸物件の空室問題は切実となっております、アパートオーナー

は対応に悩まされている。色やテクスチャー、機能など塗装ならではの手法で部屋の魅力が高まり空室問題が解決されるよう仕向ければ市場性は大きい」と、「冬場の仕事をつくりたい」との思いが内装という大きな市場への足がかりとなりつつある。